

西村 佑子 著

『《グリム童話》の魔女たち  
——ドイツ魔女街道を歩く』

(洋泉社 1999)

田ノ岡 弘子

いつの頃からか、児童書やアニメで「魔女」という名を見かけるようになって、よくは知らないのだが、そうした作品で超能力を発揮するヒロインは、かわいい利発な少女だったり、ふくよかなやさしいおばあさんだったりする。一方私の脳裏では、「魔女」という言葉はすぐさま「魔女狩り」「魔女裁判」「焚刑」などにつながり、できればそこから顔をそむけていたいような思いにかられる。たしかに日本でも、山姥がいると信じられていたし、つい百年ほど前にも、三十年ぶりに深山から里帰りした「サムトのババ」が、嵐を起こして村に被害をあたえるとして里から締め出された、つまり村議会のスケープゴートにされたわけだが(岩本由輝『もう一つの遠野物語』)、しかし、そうしたマレフィキウム(人畜に危害を加える呪術)をこととする秘密結社を仮想し、闇夜に空を飛んでサタンの麾下に集合するサバトの存在を確信し、民衆の俗信や集団幻想や被害妄想を最大限に利用して、魔女(Hexe)と言い立てられた女性たちを、あるいは男性の魔女たち(Hexenmeister, Hexer, Hexerich)を逮捕し、拷問によって自白と密告を引き出し、何世紀にもわたって何万とも知れぬ人々を焼き殺していったキリスト教会の大量虐殺のメカニズム(ノーマン・コーン『魔女狩りの社会史』など)は、古来の異種異人の迫害排斥の歴史のなかでも桁外れに大掛かりなものであっただろうし、わずか半世紀あまり前のナチズムによるホロコーストも思い出されて、人類の一断面に絶望的な戦慄を覚えてしまう。

しかし、西村佑子さんははるかに前向きな姿勢で、潑刺たる好奇心をもって魔女たちとつきあい、交わるようできて交わらない二筋の魔女街道をつき進む。一つは『グリム童話』の魔女たちに行き会う昔話の道であり、もう一つは各地ゆかりの魔女たちの住まう伝説の道である。両者ともに、もとは口承で伝えられた民間説話であるが、昔話がこの世の時空を離れたもうひとつの世界のお話であるとすれば、伝説は、それが真に生きている段階では、現実にあったことと信じられていた、村とその周辺にまつわる話ともいえるだろう。伝説の魔女は空を飛んでサバトに行くのに、「どうして『グリム童話』の魔女は空を飛ばないのだろうか」といった素朴な疑問が、魔女探しの旅を始める「キッカケ」だったと「あとがき」にある。村社会に密着している伝説とはちがって、時と所を定めずにファンタジーの国へ飛翔する昔話は、現実の出来事とか社会の通念の影響をもろに受けません

むのではないか、などと頭で適当に考えて処理するのは、まったく西村さんの流儀ではない。彼女は『グリム』の森を探索し、ひとつひとつの事例について裁判の再審を請求し、また一方で実際にハルツ地方を旅して、伝説の舞台を実地検証し、さらに新たな魔女伝説を発掘する。そうした六年間の収穫をもとに、昨年六月、この書物が上梓された。

その第一部は本のタイトルどおり、『グリム童話』に登場する魔女たちを扱っているが、それと並行して、魔女学入門講座も随時織り込まれている。『グリム』で「魔女」(Hexe)を「女魔法使い」(Zauberin)と言いかえている例の見られないことから、著者は両者の違いを確認するために、「魔女」の語源(「垣根の上の女」)から説き起こし、魔女は「ひとり村はずれの森に住むはぐれ者」、あるいは「この世とあの世の境を行き来できる異界の魔物」で、「悪魔と結託して」人畜に害をもたらす邪悪な存在であり、一方魔法使いは善悪両様の意味で使われ、フランスの「仙女」(Fee)に相当する場合もあると区別する。そのうえで、『グリム童話』に出てくる魔女と女魔法使いに共通しているのは、「ともに非業の死をとげている点だ」と指摘し、さらにはそのどちらでもない、たかだか毒リングで殺人未遂を犯しただけの「白雪姫」の母親まで、真っ赤な鉄の靴をはかされて死ぬまで踊らされるというのは、魔女狩り時代の拷問を思わせるという。そして魔女の拷問と処刑についてきわめて具体的に、地名や博物館の名を挙げ、挿絵を添えて説明し、自白と密告による大量処刑で二つの村が消滅した例などを示したのちに、かたや「群れをなさない」孤独な『グリム』の魔女十五人のアンティ魔女裁判に入っていく。

ここでも著者は、古代の地母神をルーツとする異教の呪術信仰が、十三世紀以降のキリスト教会によって、キリスト教に敵対する魔女集団の観念へとすりかえられ、迫害が合法化されていった背景をまじえながら、『グリム』の魔女たちがどのような魔法(呪術)を行い、どのような処罰を受けたのか、そのリストを作成し、各事例を検証する。継子を殺そうとして逆に継子の機転で実子を殺すはめになり、あげくに満身創痍で踊り死にをする(「恋人ローラント」)。一宿一飯の恩をかけた兵隊に密告という仇を返され縛り首になる(「青いランプ」)。迷いこんできた子供たちに焼き殺され、一切合財盗まれる(「ヘンゼルとグレーテル」)。というわけで西村さんは言う：彼女たちは「ほとんど悪いことをしていない。にもかかわらず、魔女と呼ばれて、悲惨な最後をとげる。それは、何の根拠もなしに断罪された魔女狩り時代の魔女とよく似ている」、「『グリム童話』の魔女の死は魔女裁判の拷問死と処刑の反映としか思えない」。たしかにそのとおりであろう。そして魔女だけでなく、「いばらの中のユダヤ人」、小人の「ルンペルシュティルツヒェン」、「フィッチャーの鳥」の男性魔女(Hexenmeister)などの非業の死も、異教徒の排除や迫害といった社会的要因と無関係ではないだろう。ただ一方で、昔話は魔女狩り時代をつきぬけて、もっと昔の原初的な魔女の姿も残しているようで、たとえば「ホレおばさん」はまぎれもなく魔女の始祖(地母神、ティアナ神)の異名であるし、彼女の行為も、豊穣をもたらしかつ懲罰を司る超自然の存在にふさわしい。また魔法をかけるだけで姿を現さない魔女たちも(「蛙の王さま」「鉄のストーブ」)、むしろそうした超自然の、メタフィジカルな、あるいは象徴的なイメージではないだろうか。「誰かが蛙になったり、ストーブに閉じこめ

られなければ、話は始まらない。しっかり話しあいなどしていたら、なにも起こらない。童話のご都合主義というものである。呪う役目を負わされる魔女こそいい迷惑だ」といった明快な裁断には、あれこれの昔話の理論を持ち出さずとも、いささか異論のあるところだろう。人間一生の間に、鉄のストーブに閉じこめられていると思う瞬間が、ぜったいないいものかどうか……。

とはいうものの、西村さんの思いきりのいい、はぎれのいい、わかりやすい論調こそ、この本の身上でもあり魅力でもある。そして魔女側の弁護団長としての意気込みが、うがった解釈を生みもする。「お湯が沸いたら、みつげ鳥(男の子の名前)を釜茹でにしちゃうんだよ」と言う魔女は、女の子をからかって「ほんの軽口を叩いただけ」なのに、それを本気にした子供たちは逃げ出して、魔女そこのけの魔法を使って変身し、追いかけてきた相手をついには溺死させてしまう(「みつげ鳥」)。「恐ろしいのは軽口と子どもの思い込みのほうではないか」というわけだが、料理女の言葉を「軽口」とするその大胆な解釈には、強烈に発想の転換を迫るものがある。猛禽に変身して赤ん坊をさらい、こんどは大きくなったその子を釜茹でにしようとするこわい魔女は、ほんとうはただのふぎけ好きの賄いのおばあさんで、まわりの人たちが魔女だと思い込んだばかりに殺されてしまったのか。そういえば、ほんものの魔女だったら池の水くらい呑み干せるはずだものね。などと思えてくる。さらに著者は、「女をまるはだかにして、針を打ちこんだ樽へ入れて、その樽を馬に引かせて追い立てる」よう王に進言する魔女を(「白い嫁と黒い嫁」)、自分のことと知っていて自分で自分の処遇を決定したのだと確信し、つぎのように言う:「このように魔女はいさぎよい。魔女はけっして弁解しない。どんなに不当な仕打ちをうけても、どんなに人間から忌み嫌われても、我が道を行く。[中略]これぞ魔女道。ひたすら王子さまの来るのを待って、結婚という幸せだけを与えられる『美しいお姫さま』と比べて、『悪い魔女』の人生はじつにアクティブで、波瀾に富んでいる。そういう魔女にシンパシーを感じないではられない。」

さて第一部の後半では、おなじみの「ヘンゼルとグレーテル」、「いばら姫」、「ラプンツェル」などを中心に、森でひとり自給自足の暮らしをする老女、巫女や産婆や「賢い女」、代母や名づけ親、といったそれぞれの魔女の素性を解き明かす。拷問や火刑の費用からそれに携わる役人たちの給料まで、当の魔女の金でまかなわれていたのだから、「ヘンゼルとグレーテルが魔女の財産を取りあげたのは、帰りの電車賃くらいな気持ちだったかもしれない」と言い、ローマ教皇お墨付きの魔女狩りマニュアル『魔女の鉄槌』(1486年)が世に出てから、それまで賢い女(weise Frau)として頼りにされていた産婆や巫女たちが、公然と魔女に仕立てられていったその経緯を説明し、「賢い女と魔女の区別は、彼女たちが生きていた社会のさじ加減ひとつだ」として、「いばら姫」を呪う巫女にも「時代に拒否された怒りや悲しみ」を読みとる。つまり西村さんは、つねに社会史的背景を眺め渡しながらか『グリム』の世界に遊ぶのだが、一方では、今の私たちも楽しめる個々の童話ゆかりの土地や施設を案内し、古今の画家たちによる挿絵なども紹介してくれる。それを見ながら読者も思わず想像を逞しくする:こんなに腰が曲がって、目もよく見えないの

なら、いかに有能な女性とはいえ、ひとり暮らしはさぞかし骨だろう。猫や雄鶏は手をかけても手伝ってはくれないし、そこへ若いもんが迷いこんできたら、女の子はこき使いたいし、男の子は溺愛して食べちゃいたくなるのもわからないではない、などと……。

第二部（「伝説の魔女」）に入って、著者は「ヴァルプルギスの夜祭り」をめぐり、伝説にとどまらずドイツ文学や旅行記など、豊富な挿絵や写真も添えながら、ジャンルを超えて自在に書き進めている。もともとゲルマンの民間信仰では、春を迎える喜びの祭礼であり、年に一度鍋や楽器をかついで山に登り、神々への儀式ののち食べたり踊ったりして日頃の憂さをふきとばしていたものが、異教の神々を徹底的に追放するキリスト教によって、悪魔と魔女のおぞましいサバトにされてしまった。ブロッケン山へは空を飛んでいったという当時の魔女たちの自白は、饗宴での淫らな行為同様、ある種の薬草による幻覚体験だったことが今日では知られているが、「農村の貧しい女性たちは、日常の鬱屈とした抑圧から解放されたくて、秘薬に頼り、忘我の状態を楽しんだことだろうし」、そのためにも女たちは秘薬を「作る。作るのが女性なら、その効果を試そうとするのも女性だ。新しいものを受けいれる女性の果敢な行動力は、禁断の木の実を食べたイヴからの遺伝なのだ」と西村さんは書く。ところでこのテーマとは切っても切れない縁があり、ブロッケン山のヴァルプルギスを広く世に知らしめたゲーテについても、その『ファウスト』第一部の筋を追いながら楽しくわかりやすく語り、さらには追放されたゲルマンの神々に同情と共感を惜しまなかったハイネのことも、まさにシンパシーをこめて紹介し、ハルツの人々にとって「いわばゲーテが恩人なら、ハイネは親しい友人」と結ぶ。そして最後に、著者は読者を現代のヴァルプルギスへと案内する。いささか観光慣れしたゴスラー、ひっそりした佇まいのヴェアニゲローデ、著者ご推薦のシールケ——短文をたたみかけていく生き生きとした描写は、臨場感にあふれ、この本のハイライトといえるほどに、文句なしに楽しい。

第二部の後半では、土地と時代の風景をバックに、魔女伝説の実例数点が示される。魔女狩り以前の雰囲気伝えるおおらかな夜祭りの話、近所づきあいが下手なばかりに隣人に密告された女の話、古来の信仰や薬草を守ろうとする魔女の話、そして巨人族の王女「トレンドウーラ」、ヴァーグナーとハイネに題材を提供した「タンホイザーとヴェーヌス」、イルゼ川にまつわる「魔女とイルゼ姫」の話。そうした伝説に、著者はハイネ同様古代の神々の声を聞き、つぎのように書いて魔女探訪の旅を終える：「時代がたって、そういう民話の主人公は魔女や悪魔なのだと権力者はきめつけて、白眼視し、迫害した。しかし、いくら権力者がそう言いたてても、民間人はそこに親しい古代の神々の息吹を感じとっていた。彼らは古代の祭りを祝い、民話を語る。魔女伝説もまたそうして民間に伝えられていったのだ。」

西村さんの歩いた道が、魔女の表街道であるとすれば、人気のない裏街道も、まだそこに残っているかもしれない。いまはもう迷妄の時代のばかげた話として、人の口にはぼることはないが、前世紀の後半からかろうじて聞き取られ文字化されてきた、おびただしい数の魔女伝説、ドイツ・オーストリア・スイスにとどまらずヨーロッパ全土から採取

され、ドイツ語で出版された多数の伝説集——そこに登場する魔女たちの行動は、いったいいくつかのパターンに分類されるのだろうか、どの国にもどの村にも共通するものが多いように思われる。管見とおぼろげな記憶から一例をあげれば、牧夫が山で大きな白猫（または黒猫）に出会い、そいつの前脚を切りつけてやったら、村では女主人が腕に大怪我をしてうんうん唸っていた、やっぱり牧夫の仕事を見張るために猫に化けて山に来てたんだ、といった話。そこでは語る側も村人であり、語られる側もまたおなじ村の成員であり、おそらく現実に起きた異様な出来事として、口から口へと伝えられたのだろう。たんなる噂話ともちがう、またお上に届け出る口述とも異なる、その舌足らずな表現とステレオタイプの伝達内容からは、当時の民俗社会のありようの一端が、人々の心に根を下ろす俗信や不安や猜疑が、垣間見える気もする。たしかにキリスト教会による魔女狩りは、そうした村々を直撃し、無数のおぞましい伝説を産んだ。しかし教会の観念と民衆の俗信との関係は、鶏が先か卵が先か的な側面もあるようで、その意味で現代の社会とまったく無縁の問題とも言いきれない。そして魔女狩り最盛期のものと思われる伝説にも、いまの私たちがなりのアプローチによって、ひそかな道が開けるかもしれない。たとえば処刑された女性がいかに真正正銘の魔女であったか、その行状を挙げつらねる話なども、現代の目で見れば、賢明で有能な、しかも親切で寡黙な女性像を浮かび上がらせ、女性史あるいは民衆史の白紙の一ページにその名を残すことさえできそうに思う。またそれを語り伝える側も、魔女狩りの通念にどっぷりつかって裁断したものか、それともわりきれない部分があるからこそ、心にかかって語らずにいられなかったのか、あるいはさらに社会通念を逆手にとって、つまりそれを隠れ蓑にして、魔女の事蹟を人々の記憶に刻みつけたのか——というのはいささか思い過ごしでもあろうか。

近年本国のドイツでは、魔女はさまざまな場にかりだされているという。祭りでの仮装や商業ベースの魔女グッズは別として、童話の本ではおおむね「意地っ張りだけれども無邪気で愛すべき存在」へと変身し、青少年向けの啓蒙書では、「広範な資料研究を踏まえた個々の事例に即して、歴史的な大衆妄想の多様な背景を理解させようと努め」、そしてなによりもフェミニストたちによって「政治的な役割を負わされ、一方では女性の抑圧のシンボルとして、他方では女性の自由と戦闘力の原型として」多数の刊行物に登場するという (Enzyklopädie des Märchens Bd. 6, de Gruyter)。西村さんの今回の著書も、そうした流れに沿ったものであろうし、私たちの時代における魔女の復権が、罪なくして殺された無数の人々への真のレクイエムであることを願っている。